

国際シンポジウム「死生をめぐる対話 エジプトからの眺望」

天上と地上のヴィジョン

——スーフイズムの初期モデルをめぐる（後編）*

ハーラ・アフマド・フアード

小野 純一／中西 悠喜 訳

吉田 京子 校閲

第 3 章

ラービア・アダウィーヤ（ヒジュラ歴 180 年没）

愛される者の誘惑、実存中心主義

彼女は高貴な宿命の聖女——現世における永遠の処女——であり、彼女についてスフヤーン・サウリーはこう言っている。

〔彼女は〕礼儀正しい女性であり、彼女と離れ離れになったら、私は心の安らぎを得られる者を見出せなくなるだろう。

この一節は、ラービアの人生に重荷としてのしかかっていた抑圧を言い換えたものであるが、ここで彼女はそれを超越し、転倒させ、その頂点へと至ろうとする。それは言ってみれば、社会・教義・知恵・ジェンダーなどの多様なレベルで高い地位を確立することを目指してのことである。とはいえ、彼女の素性やその苛酷な生涯について語り伝えられているところを考えれば、それはありえそうもない。はたしてこれは本当にラービアが生きた現実なのか。それとも彼女が高遠神聖であることを切望し夢見た伝承者たちの想像の産物なのだろうか。もちろん、「語り」の小細工や不完全さは言うまでもない。おそらく我々は答えのない問いを投げかけている。ひょっとすると、そ

うすること自体問題ではないのだ。むしろ本論の文脈においては、答えすら重要ではないのかもしれない。というのも、我々が焦点を当てようとしているのは、この聖女をめぐる諸々の伝記がもつ深みと偏差のパラドクスなのだから。ひょっとすると、「問う」ということそれ自体が喜びなのかもしれない。——我々が求めるものを与えてくれる「可能性を秘めた予期せぬ諸世界」を開く「指標」となるものを求めて深みへとなめらかに滑り込んでいく。そういった喜びである。

ラービアは、奴隷の放蕩の世界から無償の崇拜と神的存在との交流の世界への稀有な転換点である。少女は孤独な道を歩いた。異国の者として、孤児として、そして貧者として、恐怖に怯えながら歩いた。人々の残酷な視線が彼女の挙動全てに向けられた。地位や力のある者たちは彼女をあらゆる仕方で蹂躪し、その抑圧下に踏みつぶした。そのとき初めてラービアは自らの存在に気づき、自身の真の本質に触れた。そのとき初めて彼女は地上での隷従の重圧をかなぐり捨てたのである。そして真理が彼女に啓示された。それは高遠なる神的永続の世界に自らも深く根ざしているのだという真理である。

ラービアは初期のこの集団の完成態を、成熟の極みの最初の兆候を〔部分的にであれ〕開示していたのか。ここにおいて初期のスーフィー的意識は変容するのだ。つまり、苦痛と苦悩から、異邦の悲劇と苦悶から、そして現世と来世をめぐる脅迫と警告から、愛慕のヴィジョンや甘美と平穩、そしてこの世ならざる楽園の香りが入り混じった現世の美を觀照する場へとなめらかに移行するのである。愛しき人との睦みはこの聖女の奥深くにひそみ、いまやその実存の中心をなすに至り、彼女自身の世界の内に現前の形而上学を確立する。これは貴重な約束に基づくものであり、楽園の歓喜〔へ至るための〕決まりごとに基づくものではなく、真理のヴィジョンおよび愛する者と愛される者とは分かち合う「見つめあい」を通じてのことである。そして彼女は神の注視と注意を獲得し、注目を浴び、主の愛しい眼差しを確保し、その結果、〔彼女の〕眼は神の眼差しの中奥深くを覗いているかのようになる。枝は愛を通じて根に還る。かつてそこから創り出され、この創造という自己陶醉者の自己愛の瞬間そこから伸びていったのと同様に。これについては、

ハッラージュが次のように語り伝えている。「ここで〔言われている〕来世での待望される約束というのは、愛する者という個人が一掃され、包み込まれ、吸収され、想い想われ、そしてその思慕の対象たる一者の領域へと溶け込んでいくことである。それは〔神秘家の〕眼を歓喜させるような領域である。——〔もちろん〕愛する者は神の現存の中で滅びてしまうが、それは『永遠の合一』『永遠の安寧』という意味で『滅びる』だけなのである」。

ダマスカスへの旅

ある伝説的な人物〔アッタール〕がこの魅力的で劇的な場面を我々に示してくれている。それは、彼が伝説の人とするところのこの聖女〔ラービア〕の内部で〔起こった〕意識の黎明を表す場面である。『神秘主義聖者列伝』の中でアッタールは次のように言う。

ラービアが成長し両親も亡くなったころ、バスラで飢饉がおり姉妹は離散してしまった。彼女が表に出て目的もなくさまよい歩いていると、不徳な男が彼女を見つけ〔捕えて〕、6 デイルハムで売り飛ばしてしまった。買い手は彼女に重労働を課した。ある日、見知らぬ男が〔道端で彼女のそばに〕やってきた。彼女は〔彼を〕避けて歩みを進めたのだが、その際、土埃の上に倒れてしまった。彼女は言った。「おお、我が主よ。私はこの地ではよるべなき者、孤児にして、囚われの身であります。そしていまや奴隷にもなりました。ですが、私が最も気にかけているのは、あなたが私に満足しておられるかどうかということだけです」。すると、彼女は自らに語りかけるある声を聞いた。「悲しむでない。清算〔審判〕の日には、天上にて〔我の〕近くに待てる者たち〔天使〕はお前を尊敬し、お前の地位をうらやむことであろう」¹⁰。

離別は複合的で凝縮され錯綜したものであり、突如襲いかかるその深さと重みの感覚であり、残酷で無限定のものである。また、あらゆるレベルにおい

て奪われてしまった現存であり、幾重にも重なるあらゆる形と表情の抑圧を伴う悲劇的な状況である。それらは互いに作用し影響しあい、かの憐れな少女の置かれた驚嘆すべき尋常でない状況の驚くほど豪華な織物を協働して織りあげる。

ラービア——ごく一般的な大衆、取るに足りない人々と同じ、素性の知れない少女。彼女は荒んだ道を独り行く、よるべない清貧の者であり、奴隷市場で6ディルハムと引き換えに売り飛ばされた囚われの奴隷。アティーク家の使用人であり、ほんの数ディルハムで自らの生死を握ることになった主人の屋敷に仕えた。主人は彼女のか細い体に苛酷な労働を課した。そしてついに彼女はその縁もゆかりもない屋敷から外路へ飛び出した。しかしそこにはただ空漠たる広がりで見知らぬ男たちの好奇な視線があるばかり。孤独と放棄の空間に一人たたずむ彼女は格好の標的であり、彼女の現存が顧みられることなどありはしなかった。彼女には尊厳もなければ、情けがかけられることもない。見知らぬ男たちの脅威から身を守る、自分のための避難の場さえ彼女にはなかった。

このように物語は我々の手をすり抜けていく。何故なら、どのようにしてラービアがスーフイー道を歩み始めたかについては、物語という鏡の反射を通じて〔しか知りえない〕からである。それは離別や恐怖や残酷な現世の孤独という諸空間の中に、また、相関的な抑圧の回帰線の狭間に映し出されるものである。そこに映る彼女は、物理的・精神的な面での如何なる支え・保護ももたなければ、社会的・経済的な面での如何なる防波堤ももたない孤独で弱い女性である。彼女は特定の家族・部族・村だとか、高貴な血筋・社会的地位を伴った階層などに属したわけではなかった。また勢力や影響力、権力や地位、多くの富などを有する部族に属したわけでもなかった。ここでアッタルは、少女が貧困家庭に生まれ、粗末な家で四女として生まれたために「ラービア〔四番目の女の子〕」と名づけられたことを我々に語っている。彼女が生まれたとき、両親には彼女のへその緒にすりこむためのほんのわずかな動物の油脂もなければ、ランプを灯すための灯油もない、生まれたばかりの不幸な赤子を包んでやる一片の布切れすらない、という状況であった。こう

した屈辱的な貧困は両親の死後、バスラをおそった飢饉とも相俟って、齒を食いしぼり身を砕くような欠乏・困窮へと悪化した。これにより、少女らはともに暮らしお互い慰めあい続けることができなくなった。彼女らはそれぞれに日々の糧を得ようと、この世を家もなくさまよい歩いた。これらのことは全て、結局のところ、少女が家族からの最低限の庇護すら得られず、父親からの家父長的な援助（たとえ貧困家庭のそれであっても）をも欠いていたということの意味する。しかしアツタールの語りからは、ラービアの家族がそのみずぼらしいほどの困窮にもかかわらず、彼女から誇りや人間としての尊厳を完全に奪い去るまではしなかったということがわかる。いくら貧困にあえいでいたとしても、家長〔彼女の父親〕は耐えられないほどの苦痛がない限り、自分のことを貶めたり、不謹慎にも卑下したりなどということはしなかったのである。彼は厚かましく他人の許諾や軽蔑の視線に無頓着に物乞いをするようなことはなかった。確かにこの点について、ラービア（四姉妹の四女）の生まれた日、隣人宅からランプに火を灯すための一滴の油をもらってきてほしいという妻の願いに彼女の父親は応じなかった、という逸話がアツタールによって語り伝えている。この逸話は、4人の幼い娘たちと自分の妻（つまり彼女らの母親）を守っていかねばならないという、この貧しい男が置かれた厳しい苦境と彼の上にのしかかる重荷を表している。妻のそうした頼みを拒むことが父親の威厳（家父長制に由来）を表すのではなく、彼が拒絶した理由がそれを示している。つまり、もし彼が物乞いをすれば彼らは施してくれなくなるであろうから、決してそうしまいと彼自身心に誓っていたのである。いずれにせよ、彼はそれにもかかわらず、最終的には隣人宅を訪ね、戸を叩いた。しかし結局は家にいる妻のもとに戻り、隣人は戸を開くことを拒んだと彼女に伝えた。彼女はさめざめと涙を流したという。

こうした苦痛に満ちた状況をめぐる語りについて一瞥することで、この不幸な家族の苦しみが如何に深いものだったかが明らかとなる。彼らは極限の困窮状態がもつ耐えきれない重みの下で、懇願の手を伸ばさざるをえなかった。そしてやがて彼らも隣人もそうした状態を疎ましく思うようになる。少なくともかの憐れな父親にはそう映っていた。彼は誰に対しても何事も頼む

まいと心に決めていた。何故ならたとえそうしても誰も協力しようとしな
いだろうから。彼は誇りや威厳を失うことがなかった。また物乞いや懇願の恥
辱に屈することもなければ、援助を拒まれるという不面目に屈することも
なかった。また、彼や彼の妻が耐えていた内的な葛藤が如何に残酷なもの
だったか、そして傷つきつぶれた感情が如何に根深いものだったかも〔上
のことから〕明らかだろう。このような感情から、彼は〔他人に助けを〕拒まれ
たときの恥辱と援助をしぶられたときのひどい不面目とに苦しまなくて済む
よう、誰に対しても何事も頼むまいと誓うようになった。しかしながら錯綜
した状況と厳しく容赦のない困窮の残酷さ、そして憐れな妻の懇願（彼女と
て夫と同様、厳しい生活を強いられていたわけである）——これらの全てが
彼を打ち負かし、彼は彼女の言う通りにした。それは、この憐れな夫婦が生
まれたばかりの赤子を一般的なやり方で祝福してやるすべもなく、覆いかぶ
さる暗闇に赤子の無垢な顔を見るすべさえも失った残酷な瞬間のことだった。
父親が本当に誠実であったのか、それとも実はただ彼女に譲歩するふりを
していただけなのか。〔それはわからないが〕いずれにせよ、彼が実際に行った
のは「誰からも何も受け取らない」という彼自身が立てた誓い〔に他ならず〕、
その中には「自存」の種が植え込まれているとも言えよう。自存とは何もの
も必要としないことをいう。それは貧しいからといって分別や多感、知識や
礼節を失ってしまっているわけではない、（4世紀〔西暦10-11世紀〕の百科全
書の知識人タウヒーディーが「貧しさが人々になすこと」に関して語ってい
る言葉を借りるならば）「必要に迫られて、恥を捨て去る」ことのない、そ
ういった貧者たちによってなされる一種の受動的な抵抗である。

何ものも必要としないと宣言し、〔他者からの〕助けは拒む、そしてそう
いった行為の中に含まれるあらゆる希望を放棄する。それは反逆の秘めたる
宣言。辛酸をなめるような、落胆と悲嘆の感覚に満ちた反逆。侮蔑されれば
侮蔑で返し、否定されれば否定し返す、わきへ追いやられれば逆に追いや
り返す——それはそういった形をとることさえある（そしてまさに、意識が及
ぶ範囲と、できることなら実存そのものから完全に自らを消し去ろうとする
ことさえある）、社会に向けられた一つの反逆である。そこには暴力（心象

的なレベルでの暴力であれ、現実の暴力であれ)の行使が必然的に伴う。そのような暴力は、この不公平な社会とそこに住まう野卑な者どもに対する略奪、強奪、殺害、破滅、流血の粛清にまで至ることもある。人々は他者の困窮と苦しみに対して何の慈悲ももたず、彼らに人間としての然るべき権利さえ与えない。そして苦しみにあえぐ他者の現存を無視し人間としてのプライバシーを蹂躪することで、彼らを残酷にも実際に破滅の瀬戸際にまで追いやっていく。彼らは非人間化、利用価値、疎外という文脈の中で当たり前のごとく他者の現存を侵害し、四方八方あらゆるレベルにおいて彼らをあらゆる種の軽蔑・嘲笑・差別的慣習と極めて低劣な頑迷な考え(抑圧という蛮行については言うまでもない)にさらすのである。

タウヒーディーが『洞察』*al-Baṣā'ir* 中で以下のように伝えているように、極端な社会的選良主義を伴うこうした平均的社会(あるいは、こういう言い方が許されるならば、富裕層や、高貴さ、権力・力・影響力などを有する者たちへの極度の偏向を伴うこれらの社会)における貧者の奈落のような立場を描写する先人もいる。

人は貧乏になると、信頼してくれていた人も彼を糾弾するようになり、よく思ってくれていた人も彼を悪く思うようになる。人は貧乏になると、親戚や兄弟、家族から縁を切られることになる。彼らはその人物を嫌い、拒絶し、屈辱を与え、容赦してくれなくなる。……貧困は種悪の根源であり、貧しい者に対してあらゆる嫌悪をもたらす。窮乏よりもまだ死の方が親切である (*al-Tawhīdī, al-Baṣā'ir wa-al-dhakhā'ir*)。

赤子のラービアが誕生した瞬間の伝説的な逸話を悲劇的に語る中で、師〔アックル〕はかの高遠なる聖女が有する悲惨な家庭環境をうまく伝えている。それはラービアという敬虔なる禁欲家の生涯の物語に重要な影響を及ぼす背景である。換言すれば、彼女についてのこの〔逸話〕は、その後スーフイーとしての好ましい性質(即ち「何もかも必要としない」「神のみを頼りにする」「神の前でのみ自己を卑下する」)を強調するような数々の逸話に

直面することになる。貧困とはあらゆる精神体験の中核をなす特徴であり、それは預言者・使徒・聖者に関するほぼ全ての伝記に現れる誉れ高い特徴である。そしてまたそれは可滅的な質料世界に対する明らかな蔑視を示している。何故なら消えてなくなるような立派なものをいくつも集めて喜ぶなど、蜃気楼をつかむ者のごとく、風を身にまとう者のごとく、虚偽という幻の壁によりかかるようなものだからである。預言者・聖人・聖者は常に、真に富める者は善き敬虔なる貧者だけだと主張する。何故ならそうした者たちの救いの場は永遠なる来世であり、めいめいの命の手綱を絶対者（即ち、その恵みを与えもすれば、しぶりもする唯一の御方）に託しているからである。彼らは神に対してのみ自己を卑下し、自らの信頼を神に託す。あらゆる宗教で神は貧者に樂園と喜ばしい運命、そして審判の日の公正なる判断と神に最も近い光栄の座などを約束する。こうした文脈では、「貧困」という概念には、現世とその切迫した質料的関心事の重荷から真に解放されることが含意されている。というのも、何ものも所有しない者は何ものにも所有されず、この虚しき世界の全ての誘惑の虜とならずにすむからである。そうした者こそが虜となった被造物どもの中で唯一自由でいられる。何も所有しない者は、その手の内に世界全体を所有しているのである。何故ならそうした者は自由な主人であり、創造主（祝福を与える者、全てを所有する者であり、彼の意志と力、統治権は絶対的なものである）に対してのみ仕えるからである。カーシャーニーは『教示の諸階層』の中で「貧困とは所有することについて無垢であること」だと言っている。

またクシャイリーも『書簡』の中で、貧困と清浄なる貧者とを賞賛して、同様の主張を行っている。

貧困とは聖者の印、選ばれし者の装飾であり、至高なる神が自らの敬虔なる者と預言者たちのための選択のことをいう。貧者は神が自らに仕える者たちの中から、そして自らの秘密の宝庫から選び出す選良であり、彼が創造したものの中でも比類がない。神は彼らを通じて創造を保持し、また彼らを祝福することによって「創造」というものに恵みを付与す

る。辛抱強い貧者は審判の日、神とともに腰かける。預言者ムハンマド——彼の上に祝福と平安の在らんことを——は次のように言ったという。「あらゆるものには鍵がある。楽園への鍵は極貧の者の愛である。辛抱強い貧者は審判の日、神とともに腰かける」。ムアーズ・ナサフィーは言う。「神は如何なる民族をも破滅させたりはしない。たとえ彼らが何をしようとも、貧者を辱めたり貶めたりするまでは」。また〔ハムドゥーン・〕カッサールは言う。「もしイブリースと彼の手先がともにやってきたなら、貧困への恐怖に満ちた心ほど彼らを喜ばせるものは何一つない」。ジュナイドはと言えば、次のように言っている。「おお、汝ら貧しき者たちよ。お前たちは至高なる神のことを知っており、また至高なる神を崇めている。お前たちが神と二人きりになったとき、神と如何にあるべきか考えよ。……（中略）……もし至高なる神に対して自己を卑下することが善であるなら、神以外の何ものも必要としないこともまた善であり、これよりも大きく立派なものなどない」。またアブー＝ダルダーは次のように言ったという。「富裕者と同席するくらいなら、私は城の上から落ちてバラバラに砕け散る方がましである。何故なら私は神の使徒が『是が非でも死者と同席することは避けなさい』と言ったのを聞いたからである。『おお、神の使徒よ、死者とは誰のことですか』と尋ねられて、彼はこう答えた。『富裕者のことである』と」。ラビーウ・イブン＝ハイサムは〔人々に〕「物価が高くなった」と言われ、それに対してこう答えたという。「我々は神にとってあまりに取るに足らない〔存在〕なのだから、彼がわざわざ我々を餓死させようなどとはしないだろう。彼が餓死させるのは聖者のみである」。神へ至る道は〔かつては〕空にまたたく星の数ほどあったものだが、〔現在〕残されているのはただ一つ——最も正しい道、貧困である。ここでの「貧困」とは、「強さ」「玉座」の謂いでもある。神は多くの預言者——彼らの上に平安の在らんことを——に対して、次のような形で啓示を下したと言われている。「もしお前が私の眼にどう映っているのか知りたければ、お前自身が貧者の眼にどう映っているかを考えよ」。またスフヤーン・サウリーの仲間内

では、貧者こそが王子のようであったとも言われている。さらに次のような逸話も残されている。ある貧者のもとに、彼の難儀を和らげてやろうと男が数ディーナールを持ってきた。彼は〔その男に対して〕こう言った。「私は神とともに腰かける権利を7万ディーナールで買った。土地建物だとか投資だとかを換算せずである。お前はその数ディーナールで私を誘惑して、私からこの権利を奪おうとしている」。そして彼は立ち上がり、その数ディーナールを放り投げた。こうしてその場を立ち去ったときの彼ほどの誇りを私は見たことがない。さらにそれを拾い集めたときの私ほどの卑しさも。¹¹

実は私があえてこの一節を長々と引用したのは、これらの詳細な描写は、スーフィーが「貧困」を、そして神的繁栄を約束された「富める貧者（彼らは高い地位と深い敬意を有する人々なのだが）」を、如何なる特徴を顕著に有するものとして描いていたかを明らかにする上で、極めて重要だからである。もちろん、この一節に見られる驚嘆すべきほどの詳細さも印象的ではあるが、それを単純かつ直接的に社会学的な手法による分析をしてしまうという罠に陥ってしまう可能性もある。そこには確かに目を引き、不可避的で否定できない社会的・政治的な含意があるし、解釈上の可能性として、そのような分析を棚上げすることも無視することもできないだろう。

しかしだからこそ、我々はこのテキストが有する革命的な性格を捨象することはできない。それは意識と価値観というレベルで〔成立している逆転である〕。〔このテキストは〕富裕者と彼らの不公正なものさしによってまわっている墮落した社会だとか、貧者の苦しみに対する残酷なまでの彼らの無関心だとか、もちろん宗教の命ずるところを彼らが徹底的に無視しているという事実に対しても、真っ向から立ち向かっている。宗教は不運な者たちへの同情から、共同体全体の中での相互援助を示すものとして、喜捨だとか、神自身のために貧者へ施しをすることなどを要求する。そしてそうした共同体においては、強者は弱者を助けることになっており、ムスリムは仲間のムスリムが生活の糧を得られるよう助けることになっている。彼らは自分のために

だけ生活の糧全てを蓄えてはならないとされる。富裕者は貧者に対して利他主義的にふるまうべきであり、彼らを不当に扱い、彼らの不運な境遇を私利私欲のために利用するなどしてはならないのである。ここにおいてクシャイリーははっきりと、次のように言う。

もし貧者がムスリムのための物資が安く手に入ることを望む以外何の美德ももちあわせていないとしても、それで十分である。何故なら貧者はそれらを買う必要があるが、富裕者はそれら売る必要があるからである。このことは貧者一般に〔つまり俗人の貧者にも〕当てはまる。とすれば、どうして選良たる貧者についてはそれが当てはまりえないなどということがあろうか (Qushayrī, *al-Risālah*; p. 272)。

このような厳しい批判は、こうした残酷で墮落した富裕者どもの慣習をのしり、拒絶し、また叱責・否定するだけにはとどまらない。——彼らは常に貧者と質素な人々のことを扇情し、自らの富をひけらかし、地位を見せびらかしなどして、自分たちの束の間の繁栄を誇示している。加えて、彼らは真の寛大さや美しい利他主義について何も知らない。だが〔本当は〕それらこそまさに、神に従順に従い、彼の〔定めた〕天上の法に真剣に沿うことの本質をなすものなのだ。テキストの語気は、富裕者どもの慣習の拒絶や否定にとどまらず、このような富める人々に対する直接的な脅しの方向に激しさを増していく。それは脅迫的断罪であり、彼らを怖気づかせるような現世での神罰の引き合いである。つまり、神が最も厳しくその悪事や不服従の罪で罰するのは、貧者を貶め卑しむ者たちだ、ということである。さらにクシャイリーは、まるでテキストに〔明示的に〕表れている地上での罰に対するこの程度の意識では不十分と言わんばかりに、「樂園は貧者・困窮した者（そうした者たちだけが、審判の日に神とともに腰かけることができるであろう）のためにある」という内々の約束を付加している。他方で富裕者について言えば、「貧者は富裕者よりも 500 年早く樂園に入る」という伝承が預言者——神が彼に祝福と平安を与え給わんことを——のものとして残されている

る。

それ以上に、既得物を失う恐怖に震える富裕者と、貧困と困窮への恐怖に心が取り憑かれているこれら現世の僕たちは、悪魔とその手先の喜びの原因であり、彼らの至福の種である。何故なら、現世とそこにあるあらゆるものに対して欲望を抱いたり、現世での喜びを失い、現世を貧困の中生きるということに恐れるならば、そのような人は創造者・采配者・永遠の自存する一者を想うのではなく、現世とその質料的な利益に取り憑かれてしまった人だからである。つまり、それはあたかも偽りの神々を、即ち〔唯一の〕神が創造した可死的なものどもを崇拜しているようなものなのである。悪魔に最大の快感を与えるのは、他でもなく、〔神に〕不敬をはたらくことと偽りの神々を崇拜することである。

テキスト中で示されている場面は、富裕者に対するあざけりと軽蔑、傲慢の一状態を示している。彼らとの同伴は名誉でも何でもなく、むしろその真逆である。富裕者と同席することは悲しみといらだち、そして嫌悪感へとつながる。ともにいる心地よさとか親交・対話・安全・温情・快適さなどといったものは、この間柄にはない。だからこそ、アブー＝ダルダーは、上のテキスト引用からもわかる通り、富裕者と同席するくらいなら城の上から落ちてバラバラに砕け散った方がましだと考えたのである。というのも、預言者は生ける屍同然の富裕者どもと同席することを認めなかったからである。ここでの死は、アブー＝ダルダーが高所から落ちて死ぬことを意味するのではない。そこには、スーフィー的世界観の中で死に対して通常付与される「来世に至り、最終的には最愛の人〔神〕と相まみえる道」としての肯定的な含意はない。むしろそれは「〔富裕者どもに対する〕憎悪」という含意を伴った否定的な死である。換言すれば、富裕者と同席するということは、あらゆる外的存在形態をとる一つの肉体とともにあるようなものだが、肉体自体は青白く冷たい、つまり生命の成長と暖かさを、そして素晴らしい行い〔善行〕と神的な力で満ちあふれたその現存をもたない。それは即ち、不在の闇と意味の不在を体現する悲しみに満ちた現存であり、その精神が自己実現と生命の成長を失ってしまったな現存である。ひょっとするとこうした被造物の死

骸を同伴することは、ひどい腐敗臭を発する分解過程中の死体と同席するのに似ているかもしれない。従って、そのようなものと同席する者は無がもつ致死性の悪臭を吸い込み、自身の骨の内にほこりの味を感じ、そして最も輝き美しく、また自由であるような、そうした現存の輝きの内にはとどまっていられない死の姿見（つまり全てを圧倒する不在）を通じて、そこに映り込む様々なものの中で最も醜悪残酷、否定的なものの中に現れる悲運の不可避であることを理解する。それは即ち、不死性の芳香が吹き込まれ、その乾きを敬虔さという霊薬でうるおした、そして神の御前でのみ示される純粋なる謙虚さの甘露に酔った、魂の現存である。魂の光が不在であるとき、死の漆黑たる深淵は口を開け、その悪夢のような深奥を示してくる。その結果、光の世界へ至る道程としての明るい終着点、来世での永遠と〔神の〕光り輝く尊顔を仰ぎ見るという約束の可能性は消え去ってしまう。残るのは、〔死との〕直面によって走る身の毛もよだつような衝撃と、残酷なまでに鮮明な覚醒、そして様子を伺いつつ同席している〔第三者〕（生ける屍たる富裕者との同伴は、そうした人々に対しても退廃を引き起こすのだが）に対しての〔せめてもの〕道徳的な教訓のみである。このように、テキストは富裕者たちの社会的・道徳的・宗教的合法性を否定するだけでなく、実際に永遠の約束を不可能としてしまう。残酷で墮落した富裕者どもにあるのは、無の眼差し、死のみであり、彼らは永遠なる精神的生を生きる力を現世においても来世においても奪いとられるのである。貧者が善い富裕者（そのような人が実際に存在するとして）より 500 年先に楽園に入るという預言者——神が彼に祝福と平安を与え給わんことを——の言葉が引かれているときでさえ、彼らが天からの報酬を受け取る際のこの遅れは上掲テキストの残りの部分同様、〔富裕者に対して〕否定的である。

問題の核心は富裕者の墮落だとか、彼らの不公正、貧者に対する残酷さなどと結びついているわけではないと言えるだろう。むしろそれは富それ自身のありようと結びついているようである。

ここで注意すべきは、この言説に表れている富裕者と彼らの慣習に対する批判的側面ではない。むしろその否定的なパースペクティヴ、即ち辛辣で

換位的で破壊的な側面である。それは富裕者の社会的・道徳的・宗教的価値や、富というものが有する高貴さ・栄誉・寛大さ・恵み深さ・幸福・繁栄・威厳・力などの含意について人々が想像するあらゆる考え方、概念、価値観を転倒させる中で、驚くほど明らかになっていく。ひょっとすると我々の目の前にあるテキストに描かれているこうした光景は、中規模のイスラーム社会の中で流布していた人間的賛美とか社会的栄誉の基準（なにかなく富と金銭がもつ金城鉄壁の力が最高のものであるが）に関する問いを、暗黙裡に再定式化しようとする試みなのかもしれない。即ち、それらがもつ偽りの魅力ある輝きを腐食させ、その脆さと通俗的な観念（言うまでもなく、「富」の誘惑の罠にはまった富裕者自身の心も）が孕んでいる、こうした様々なまやかしの基準相互の間にひそむ高貴な連関と逆関係が虚偽であることを明らかにする、そうした試みである。

この見解は一度確立されたならば、〔今度は〕富裕者と彼らを支持するあらゆる支配的な社会的基準を標的とする抑圧を再生産する。かくて古よりの抑圧的なヒエラルキーは逆転し、貧困は現世と来世の両方で栄誉とされる高遠なる地位へと押し上げられることになる。現世での貧困とは繁栄であり富であり、真の玉座である。何故なら貧者は神が他の全ての者の上位に選び出し、自身のこの世ならざる神秘を現世において保持するようになされた、〔現世の〕主人・王子だからである。天上の樂園で彼らは神と同席するであろう。いやむしろ、神が諸預言者や使徒たちに満足するかどうかは、貧者が彼らに満足するかどうかによるからと言った方がよい。我々が想起するのは、「（ムハンマド）は眉をひそめ、顔を背けた。一人の盲人がやって来（話が中断され）たためである」〔クルアーン第80章第1-2節〕というクルアーンの章句にみられる、使徒ムハンマドに対する神の非難である。ここで興味深いのは、神が貧者を祝福するために、被造物を存続させ日々の糧を与えるという点である。これは後に後世のスーフィーたちに「存在を保つこと」としてよく知られるようになるものの先取りである。というのも、彼の聖者たちというのは全ての存在を支える柱だからである。彼らの存在によって、神は全宇宙〔の存在〕を保ち、全てを包括する自身の慈愛を全被造物に対して向ける。単純¹²

な社会的地位だとか富裕者の主人たちに対する受動的な反乱など、ここではもはや問題とはならない。形而上学的・実存的な状況を確立するというのは、そのようなことを超えたものである。貧者はもはや低位の社会的階層ではない。〔いまや〕彼らは存在界の中心で能動的・中心的な現存へと変質する。栄誉・高位・優位・支配・真の豊かさの位置づけが神性それ自体の中心で確立しなおされたと言っても過言ではあるまい。従って、こうした貧者たちというのは、ただ存在の柱だとか諸預言者と使徒たちの後継者であるのみならず、神自身の鏡の中に燦然と輝く顕現体でもあるということになる。彼らは神に知られることとなり、また彼によって高められることになる。というのも、彼らは神の同伴者だからである。〔それは〕天と地にある全てを超越するなんという〔高遠な〕地位であろうか！ 当然のことながら、実存的・認識論的であり、かつ価値に基礎を置いたこのような土台は、あらゆる形態の地上を満す瑣末なもの、無と死による突然の襲撃、そして喪失による悲劇的な苦しみ、こういったものを、究極の者を夢見る平和、完全への欲求、不死性の芳香、そして神的美の現存の中の永遠の平穩などを望みつつ、扱おうとする試みなのかもしれない。

わきに追いやられ忘れ去られた、亜流の人々のために、不快不幸な諸現実を構成し直す〔こうした〕形而上的ヴィジョンは、公的・社会的・政治的・文化的・宗教的なレベルを有するだけでなく、確かに（この中間期に様々なレベルをもって文化的選良が想像した通り）実存的な主流でもある。

ラービアに関する逸話と、困窮した憐れな彼女の家族、身を砕くような貧困と苛酷な窮乏の陰で彼女が残酷な育てられ方をしたという事実（結果的にそのせいで彼女は捕縛と隷従へと陥るのだが）をめぐるアットール話の中に現れるイメージを分析することは可能だろうか。換言すれば、こうしたはじまりはいわば「神的な前提条件」たりえるのだろうか。彼女は初めから選ばれていた。それはあたかも、彼女のみすばらしい貧困と隷従の期間が語りと待望される栄光の未来への準備のために必要不可欠だったかのような。誕生の悲痛な瞬間が高い価値と来るべき身分を孕んでいるかのように。確かにひょっとすると、よるべなく、自由を失い、奴隷市場でたった数ディルハ

ムと引き換えに売り飛ばされるというのは、精神的熟達と真の自由、そして自己決定の本当の自由を達成する「自覚」の瞬間の黎明へと彼女が向かう上で必要不可欠な出来事だったのである。こうした喪失の旅は、無という死せる空間の深み（最悪の生活がもたらさざるを得ないその最奥）にまで落ち込んでいくが、その後、自己がまさに不死鳥のように灰の中から、深淵から再び飛翔してくると通じるところがある。ラービアが見知らぬ者たちの残酷な眼差しの中、荒みきった道の土埃の中に倒れ込んだとき、現世での否応なしの状態から自分自身を浄化し、神的自尊の深みの中で自らの根源的現存を改めて要求する、そして喪失と孤独に対するあらゆる恐怖を脱ぎ捨てて、神への寄り添いのみ心地よさを見出し、またそれを望む——それは彼女自身の起源に向けての一つの回帰であった。語り手はかくして、この少女をあきらめと放棄の空間へと投げ込む以外すべをなくす。というのも、神と寄り添い続けるという状態は、神以外のあらゆるものから完全に隔絶してはじめて達成されるからである。少なくともこれははじめの時点では前提条件なのである。

興味深いことに、アッタルの物語るところでは、ラービアのヴィジョン、つまり富と名声の前兆は、誕生のまさにその夜、高貴な宿命の聖女に顕じているという。彼はこの驚くべき物語の続きを次のように続けている。彼女の父が自分や家族やその不幸な新生児の少女の非運を嘆きながら眠りに落ちると、預言者が彼の夢に現れて言った。「悲しむことはない。汝の下に生まれたこの少女は、七万の我が民により求められることになる神の執り成しをする聖女である」。彼はまた次のようにも述べる。「バスラの太守、イーサー・ザーダーンのもとに明日行くがよい。そして彼にこういう覚書をわたしなさい。『あなたは百回祈り、金曜の夜は四百回祈る。しかし去る金曜にあなたは私のことを忘れた。それゆえ、この覚書を持参した者に誠実に得た400ディーナール金貨を償いとして与えなさい』」。ラービアの父は目が覚めると、彼は信書をしたため、門番にこれを太守まで持って行かせた。これを読むと太守はこう述べた。「100ディーナール金貨をスーフイーたちに与えよ。そしてこの高德の人には400ディーナール金貨を与え、私のところに来るよ

うに伝えなさい。私は彼に会おう。いや、私が自ら彼のところに赴き、我が鬚鬚がその足を掃き清めるまで頭を垂れて敬意を表しよう」。

このようにして、貧しき少女、生まれたばかりの不幸な赤子は、その父が夢の中で見た預言者自身に帰される伝説となる。彼は誠実な清貧の萌芽を油断なく守り、祝福された子が高い精神的位置を彼に与え、彼を矛盾と統合の都市バスの悲惨な貧者から、権力者の求める恩寵をもつ高德の人へと彼を変身させる。この支配者は彼の元に赴き、彼の足元に平伏し、彼の前に頭を垂れるのである。ここでの真の力は尊き精神的力、即ち、その祝福されし子が聖女となる父の精神的力である。これらは高貴なる聖女、ムハンマドの共同体七万人を執り成す者の誕生を祝う光景を形作る聖性の暗示である。この驚くべき物語の孕む矛盾は、予想に反しその裏をかく形で、夢と預言者性の空間を通して生を再構成する。

聖女の価値、彼女の高貴な本性と執り成しの力、そして清貧のスーフィーや彼女の憐れな家族に注がれることになる彼女に対する神的祝福、これらの喜ばしい知らせをもたらしたヴィジョンは、単にこれらの不幸な人々を底なしの状態から救い出すものではなかった。それは、聖者や聖なる民族、預言者たちや英雄たちなどの伝記に常に見られるような、継承の印であり、誕生の瞬間——後に聖人となるための伝説的瞬間——からこの聖女に与えられた聖性の告知なのである。

ラービアの生涯を描き出す語り手たちの物語的印象的な話のいくつかに目を向ける機会を持つことは有用だろう。それらの話は、彼女が富と清貧の問題を扱う仕方や、他の誰でもなくまさに神の前での全き謙虚さを表現する仕方を含むものである。

アッタールは我々に次のように語る。

あるとき、一人の男がラービアに 40 ディーナール金貨を持って来て言った。「これも何かの役に立つであろう」。すると彼女は涙を流し、顔を天にもたげて叫んだ。「あの御方は、私が現世のものをあの御方に乞うことを恥じているのをご存知です。あの御方がその所有者であるにもかかわらずです。ましてや、どうして私が所有者でない人からそれを頂こうとするはずがあり

ましようか」。また、ハサン・バスリーは次のように言ったと伝えられている。「私はある日ラービアの見舞いに行くと、ある商人が泣いているのに出くわした。『なぜお前は泣いているのか』と尋ねると、彼は答えた。『私が金を入れたこの袋をラービアのところに持って来たのですが、彼女は受け取ってくれないのではと恐れているのです。どうぞあなたが言って彼女に受け取るよう頼んでください。そうすれば彼女もおそらく受け取ってくれるでしょう』。そこで私はラービアのところに行き、何があったか話す間もないうちに彼女は答えた。『ああ、ハサン、あなたは神が跪きせぬ者にも糧をお与えくださることをご存知です。ましてや、彼の莊嚴さへの愛をもって心滾らす者にそれを与えないことがありますでしょうか。……神を知って以来、私はあらゆる被造物から顔を背けました。それなのにどうして人から金銭をそれが誠実によってもたらされたか不誠実によってもたらされたかも知らずに受け取ってよいでしょう』。彼女はさらに続けて言った。『ある日、私はスルタンの屋敷の油でランプを満たしました。そしてその光のそばで上衣を繕いました。すると、何日も私の心は闇に沈み、やっと光が訪れたのは私が繕った衣服を引き裂いてからでした。ですから、どうかその商人にお詫びをお伝えになって、彼を行かせてください』。」

ここで注目すべきことは、聖女がかくも禁欲を精練したことでなくてもなければ、彼女の屈従ないし彼女自身を貶めることの拒絶でもなく、また現世的な快樂や喜びに直面した際の彼女の性格の気丈さでもなければ、神をおいては一切何もしないことへの彼女の絶対的で不変のこだわりでもなく、あるいは彼女に先立つイブン＝アドハムのような貞淑な生の純粹さを追及する彼女の献身の敬虔さでさえない。これら全てはこの時期の禁欲主義者らの伝記にありそうなことである。真に印象的なのはこの少女の価値観の様変わりである。彼女は貧しく惨めで奴隷として物笑いの種として育ったにもかかわらず、通常、必然的に考えられる逆の状態とこれらを置き換えることによってこの苦難と窮乏の埋め合わせようとは決してしなかった。彼女は貧困に屈し、それを人生の悲劇的なめぐり合わせ、あるいは自分の人生に対する落胆、辛苦、怒り、悲嘆の陰影を投げかける芝居がかった状況として受け入れることもなかった

し、彼女が社会やそこにいる裕福な人々あるいは不当な男性の支配者に憤慨し彼らに恨みを晴らそうとしたりすることもなかった。全く逆に、ラービアは貧困に前向きで豊かな質を与え、その否定的な含みと不幸な意味の重圧を解放する生産的な人生を創出した。貧しく無一文であらゆる形の社会的保護、精神的かつ物質的援助を剥奪された昨日の少女は、今日の女王、高貴な宿命の聖女となり、特別な地位をもち献身の盾に守られた、アッタールが純粹にして純化する女性と描写した人となる。ラービアはアッタールの物語では、あらゆる禁欲主義者のうちの最も偉大な人物で全後続者の長である至高の禁欲主義者、ハサン・バスリーによってさえ比肩されない稀有な価値を与えられている。このことは聖女の清貧の実践の仕方に顕著である。それは、自然であり静謐で穏やかで、奮闘も内的葛藤もない。換言するなら、清貧は天性として、聖女の生に授けられたものになったのである。彼女が誇示するのは誠実な清貧であり、それは彼女に天上に起因する高貴な芳香を与え、現世での彼女の出で立ちを単に過ぎ去っていく亡霊の影にちかいものにする。

この聖女に関して次のように言われている。彼女はバスラの導師ハサン・バスリーの訪問を受け、彼は現世の悪に関して話を始めたところ、ラービアはこれに次のように応じた。「ああ、ではあなたは現世に執着なさっているのですね。それに執着する人というのは始終それについて話したがりですから。あなたが現世からご自分を完全に退かせたなら、現世の善だの悪だのどちらでも構わないではありませんか」。

ラービアはあるときこう問われた。「あなたはどちらから来ましたか」。「あちらの世界から」と彼女は答えた。「では、ここでは何をしていますか」と、彼女はさらに聞かれた。「今世を食っております」と彼女は答えた。「この世を、どのようにですか」と最後の質問がきた。彼女は答えた。「私は日々の糧を食し、来世に向けて励んでおります」。

我々はこの関連で、先述した逸話におけるスルタンに関する彼女の見解を思い出すであろう。彼女はあるとき彼のところからもたらされた油を満したランプの光のもとで裂けた衣服を繕っていたが、彼女の心は日々曇り、その衣服を再び裂いたとき始めて光が戻ったのである。これはなんと辛辣な意

義と含意をもった糾弾だろうか。

この関連で、我々は深遠な含みと意味深長なある逸話を忘れてはならない。それは、ラービアの視点において実存的で形而上学的な状況と位置づけられている清貧についての、より複雑な見解を明かすものと考えられる。アッタルは、こう述べている。イブラーヒーム・イブン=アドハムは、40年かけてカアバにたどり着いた。何故なら彼は一歩ごとに歩みを止め、平伏礼を二度行ったからである……。そして彼がカアバに着いたとき、カアバはあるべきところになかった。彼は嘆き悲しんだ。「ああ、私は盲になったので、カアバが見えないのか」。するとある声が彼に応じた。「イブラーヒームよ、あなたは盲になったのではありません。ただ、カアバがラービアに会いに行ってしまったのです」。……カアバがもとの場所に戻り、イブラーヒームはラービアの来るのを目にすると、彼女に話しかけた。「おお、ラービア、あなたの行いはなんと尊いことでしょう。カアバがあなたを出迎えに行ったというではありませんか」。ラービアは答えた。「イブラーヒームよ、あなたは祈りを通してここまでいらっしゃいました。私は清貧を通して来たのです」。

このように、イブラーヒームは祈りながら誇らしく尊大にカアバを期待し、それに到着するための手段として祈りを利用し、来世での天上での報酬を期待して到着した。高貴なる聖女はというと、カアバの神にその尊顔を拝し見つけてもよいか懇願するため、清貧のみを持って来たのである。他では彼女の次のような言葉が引用されている。「ああ、主よ、私の心はこの奇跡のただ中でもかき乱されています。私が拝したいのはただあなたのご尊顔でありますのに、カアバは石にすぎません」。至高なるアッラーの声が彼女に届いた。「ラービアよ、そなたは全世界の血を要請するものを一人で行うというのか。モーセが我が顔を見たいと望んだとき、我らが閃光のある山に投げやると、それは吹き飛ばされて崩れたのだぞ」。

こうして、語り手はその魅力的な物語を果てしない想像と幻想の空間のうちに紡ぎだす。視野の欠けた虜としてのイブン=アドハム、目に見えるカアバ、祈りの二元性、罰と報酬。聖女はというと、虚飾の限界をうち破り、神

の根源を探求するために内的深みに避難場所を求め、死後初めて見ることのできるものを注視する喜びを切望し、彼女の実存的清貧によって真実在を探求する。それは、彼女が純粹存在の本質、まさにその中核である純粹無を会得するまで深みに至ったことを意味する。このようにして、カアバはもはや存在の中心、地上における神の玉座にとどまることはない。それは退き、消え、そうして未だ開眼していないイブン＝アドハムには見ることができず、暗闇の世界にいるかのごとくもがき続ける。一方、聖女は実存的形而上学の中心となり、情け深い一者の玉座を宿すほどに心は広くなり、かくてカアバが彼女を求め、その逆ではなくなる。

ヤーフィイーが（ヒジュラ暦 769 年に）語るように、よき先祖が我々に聞かせるような甘いバジルの庭で聖女が亡くなると、彼女は彼女が着ていた羊毛の外套と彼女が頭にかぶっていた羊毛のヴェールに包まれた。彼女の侍女が伝えるには、彼女の死後夢の中で見たのだが、彼女はきらめくシルクでできた緑色のガウンと草色のヴェールをまとうっており、これまで一度としてみたことのない美しい姿であったので、彼女に尋ねた。「これはどうしたことですか、ラービア」。彼女が答えていった。「私の屍衣は畳まれ、封印され、天へと上げられたのです」。

死は人生の終わりであるのだから、それは説話と物語の終わりであり、死は人生と生涯の終わりであるのだから、それは伝記の主題と伝記作家の終わりであると考えられがちである。しかしながら、最後にいくつかの注記が残っており、どうしてもそれらに言及せねばならない。おそらく、これらは死を軽減し、その暗さを和らげ、我々を残酷な回帰線と宿命的な不可避性の外へ連れ出す。

補記 1

アツアールの物語が一種の暗示的でおそらくは無意識の、原フェミニズムの特徴を含むと言うのは言い過ぎではないかもしれない。これは、別の機会の別の研究対象であるので、ここでは詳細には立ち入らないことにしよう。

ただ、この種の解釈のための豊かな可能性を含むゆえ、彼がその物語の展開中に取り込んだ以下の説話を引用するにとどめよう。

善良な男たちがラービアを訪ねて来た。彼らは彼女の着ている裂けたぼろを見て言った。「おお、ラービア、あなたが頼めば助けてくれよう人は大勢いるというのに」。彼女は答えた。「誰にであれ、何であれ、現世のものを乞うのは私にとって恥ずべきことです。何故ならこの世の事物は誰のものでもなく、これらの物をその所有者が手中にするのはほんのわずかの間なのですから」。彼らは感嘆して「ここには、高貴な心持ちの女性がおいでだ」と叫んだ。さらに彼女に尋ねた。「いと高きアッラーはご自分の聖者らに奇跡をなす能力を冠しそれで困んだ。しかし、これら高き段階はかつて女性によっては達せられたことはなかった。あなたは如何にしてそれを成し遂げたのですか」。彼女は答えた。「あなた方がおっしゃったことは真実です。しかし、聖なる地位に対する誇り、傲慢、虚栄、要求は、これまで一度たりとも女性が関わったことはありませんでした」。

これは、女性を聖者の地平で男性と同等にしようとする志であろうか。それとも、男性美に魅惑され、聖なる母性、完全完璧な不可触不可侵の女性を創りだそうとするペルシア人スーフィー作家アッタールの想像力であろうか。

この問題についてアッタールは問いの地平を拓く驚くべき説話を物語る。彼は次のように言う。ハサン・バスリーと幾人かの従者がラービアを訪ねて来た。夜であったので手提げランプが必要になったが、一つも見つからなかった。すると彼女は自分の指先を口に含んでから出すと、指先が日の出までランプのように光を放った。ある者がこの奇跡がどうして起きたのか尋ねると、モーセの手は光を放ったものだと彼女は言った。「だからもしモーセ——彼に平安あれ——は預言者だったがラービアはそうではないと言われたら、こう答えなさい。『預言者によってもたらされた命令に従うものは誰でも奇跡をなす預言者らの能力に与するのです。預言者が奇跡を起こすなら、聖者も奇跡をなしえるのです』と」。これは真実であり、預言者——彼に平安あれ——の言行録により確認される。彼は言う。「悪事をはたらく者を罪から免れさせる者は預言者性に達した」。

我々はこの聖女の奇跡を熟考するという明らかな罫に落ちてはならない。何故なら、このテキスト全体が、伝説の素材であり理解しがたい意味を有し感嘆符が要求されるような状況を示すものだからである。ここで私は、上でカアバの物語やここでみたように、ラービアの様々な物語において、モーセの預言者的範例への言及が顕著であることへ注意を喚起したい。これは次のような疑問を求める。「この範例の象徴的意義はどのような本質のものか、そしてそれはこれらの物語の中でどのように表象されているのか」。

補記 2

聖女がその主人によって解放され、奴隷という拘束から抜け出したとき、生活の糧のために笛の演奏をはじめたと言われている。ラービアのこの体験は欲望と肉の喜びの世界の体験を表現しているというバダウィーの解釈に私は批判的であると告白せねばならない。私はこの珍しい実践のより深く常軌を逸した解釈の方を好む。笛は常にほろ苦いパトスと美に満たされたスーフィーの沈思の伴侶であった。笛という存在の象徴的意義はペルシア文学に根づき、特にイブン＝アラビーに影響された部分でもある。

葦笛は常に、その根からいやおうなく引き抜かれたものの象徴である。被造物である分枝がその神聖なる起源から創造の旅を通じて別れ別れになる悲哀である。何故なら、葦は大地から引き離されるからである。これは、人間という被造物の孤独の象徴である。人間は、独り神の形に作られ、子宮から出で、真実在の神から悲しくも分離し、その温かく慈悲深い根源との共存を喪失し、神から形而上学的に隔絶している。葦笛を演奏すること、この悲しく切ない響きを生み出すこと、このほろ苦いすすり泣きは、この実存的別れを嘆く一つの形であり、それを掘り下げ、この実存的分裂を修復しようと自分の運命に手を伸ばすことでのみ克服できる。そうすれば、分枝は再び神に結びつくであろう。

形而上学的実存的表現におけるこの分離の自覚はラービアの時代ではまだ広くいきわたっていなかったかもしれない。しかし、それは彼女の語り手で

あるアッタルの作品の中では明白である。ここで疑問が再び生じる。バダウィーの言うように、聖女は彼女を酒場や飲み屋へと導き、現世と神秘道との間の矛盾の旋風の中へ彼女を投げ込む職業として笛を演奏したのか。あるいは、この語り手の心は、聖女に独り身の境遇、清貧、孤独——地上的分離の空間——の際に身をおいている自覚、そして実存的分離の自覚の余地を認めたのであろうか。それは真の分離の故郷であり、この世の孤立から解放されたときにのみ終わるが、タウヒーディーが後に名づけているように、それは「分離におけるさらなる分離」としての再出発である。その際、現世には安息の場はない。それは悲嘆の旅であり、来世の芳香が立ち現れ自己が終局に向かい昏睡状態から死によってもたらされる覚醒へと歩むまで毎回の呼吸ごとに更新される。このようにして、ついには自分の故郷と最終的な安息の地に到達する。

結論もしくは補記 3

ラービア・アダウィーヤは、次のような快活な大胆さを含む言葉でもって我々をより広大で快適な空間に投げ出す。

あなたを私の心の中に置き、あなたは私に語りかける
私と座をともにしたい者たちに私は体を譲る
かくて私の体は客人たちを伴い
愛しき方は私の心にとどまりて私を伴う

これは憧れの対象である一者と寄り添うことの方を明らかに好むことを示している。彼の大地と天空は彼の臨在を受け入れるに十分な広さを持たないが、彼を崇め敬う者の心には容易く収まる。彼の臨在は彼女に同伴者らの存在を忘れさせる。何故なら、彼女は日々変容する神聖なる対話者との内なる親密な寄り添いに没頭しているからである。新たな圧倒的情熱がその対話の端々からほとぼしり、愛し合う者同士を引きよせ引き離し続け、その隔たり

の隙間に分離を取り除かんとする野望が漏れ出す。ラービアの言葉にあるように、「愛する人と愛される人を隔てるものは何もない」。喜ばしき寄り添いの境界をなめらかに越すなどという大胆な越境であろうか。そして、愛の迷路と、ハッラージュを乱心と腹藏ない申し立てへと駆り立てた耐えがたい神聖なる艶やかさの回帰線を渡るなどという情熱的な試みであろうか。ラービアは長く険しい道を行き、最後には神と人との差にも関わらず、自分自身が内的対話という親しき交わりの中にあり、告白と睦まじき共生の空間にいることを見出したのである。

ラービアを取り巻いている物語や聖性の伝説的物語のもつはぐらかしの要素とは別に、ここで我々の念頭にあるのは彼女の意識である。彼女の意識は、この複雑な脈絡（階級とジェンダー）の中で、利用、乱用、客体化、強制的圧制的侵害によって支配された現世における孤立無縁状態という罫から徐々に解放されるのである。

ラービアは市民権のない存在であった。権力を握り統制する他者の父系社会的な冷たい視線によって侵され〔またそういった存在として〕形成されていた。彼女は全ての機能において女性的身体、つまり、あらゆるレベルにおいてその所有者の意に反する屈辱的な奴隷の役割を担うものとして用いられるべき身体であると規定されたのである。

他者の強欲な目の中でラービアは地上的微睡から目覚め、自分が如何に分離されているかを悟った——他者からではなく、世界のさ中においてでも、その偽の疑わしいつながりからでもなく、彼女自身からの分離であり、自分自身が統制的で圧政的な他者の罫に捉えられていることに。ラービアが他者の瞳の鏡とその残酷な注視の中に映る自分自身を見たとき、他者によって念入りに作り上げられた魅惑的な絵と向かい合い、荒廃の程に気づいた。他者は彼女に対し精神的にも事実上も暴力を振るった。それは、この不当な仕方では彼女を隷属させ、彼女に奴隷という鎖と足かせを負わせた。

ラービアは旅立ち、自分自身の深みへ立ち返り、その根源的存在を探求し、最大限の努力を費やし他者の支配から、そして自分を略奪し侵犯する眼差しによる支配から心身を解放しようとする。彼女が見出した自己の寄り添いに

際して持った喜びと、他者の荒涼たる現前から離れ彼女自身の自由と創造的意思で表出したその現前は、荒廃と畏怖の空間で長い間多くを彼女から搾取してきた、圧政的な社会的父系の侵犯の枠組みの中ではなく、温かく親密で、常に画期的で創造的な、自分の意志力による愛の自由な告白の文脈において、絶対的・相対的他者を夢見ることを願うという慰めの領域を形作りはじめた。

ラービアは神の注目を捕え、根源のイメージにおける可変的で親密な啓示としての彼女の能力の真価を証明した。彼女は、心中で寄り添い続けその炎が彼女を養い燃え立たせる神聖な対話に値するものとなった。おそらく一組の伴侶のごとく寄り添う喜びは相互的であった。

心の領内での神聖なる靈魂との精神的対話において解放された精神の喜びが、いずれにせよ自由な身体と寄り添う喜びと矛盾するとは私は考えてはいない。自由な身体は現前の本質であり、それはまた寄り添う者にとって美的で、人間的で、洗練された啓示である。その同伴には喜びがあり、寄り添う者は息もつかずに優美な啓示を傾聴し、決して自分の見解や意思を侵犯や強姦の形で押しつけることはないのだ。

ハサン・バスリーは次のように言ったといわれている。「私はラービアと一昼夜スーフイズムや唯一なる真実在の秘密についてあまりに熱心に語り合っていたため、私が男で彼女が女だということなど忘れて過ごした」。

なんとという時間と場所の限界を超える伝説的な瞥見であろうか。これらは彼らの自我の領域を表している。自我は対話に向けて自由で広く開かれた空間を夢見ている。そこでは精神と肉体は威圧的で抑圧的で歪んだ慣習によるかせから解き放たれた安寧を見出すことができる。そこには恐れたり心煩わせたり、孤独であったり、自己陶酔的自我の病的空想や偽りの幻想の余地はない。自我の喜びは、自分たちの要請するものを映し出す単なる鏡としての他者を見出さない限り満たされることはない。それゆえ、他者を疎外し破壊しつつこれらの自己陶酔者たちは、自らの人間的で創造的な現前とその実存の生命力を破壊する。それは、ある異なった存在との睦まじい寄り添いによってしか維持されえない。

最初期の「天界旅程（ミウラージュ）」の暗示

スーフィー研究における通説では、スーフィーの「天界旅程」に言及するなら、最も重要なものがアブー・ヤズィード・バスターミーのそれであり、これに続くのがイブン＝アラビーの有名な旅であると考えられている。しかしながら、私は興味深く注目すべきテキストを見つけた。それは、ラービアに関して語られた説話の一つで、アブー・ムハンマド・ジャアファル・イブン＝アフマド・イブン＝フサイン・サッラージュ・カーリウ（1106 年没）の著作『愛するものたちを葬るところ (*Ma'ārij al-ushshāq*)』の 136 頁にある。

ある夜寝ていると、あまたの御殿と佳き木々に満ちた緑したたる庭園に自分がいて、歩いて周りその美しさに驚いている夢を見た。突如、私は緑色の鳥を奴隸の少女が捕まえようと追っているのを見た。少女の美しさは鳥の美しさから私の注意を逸らせた。「君はその鳥をどうしようというんだね。誓って言うが、これより美しい鳥は今まで見たことがないのだが」と私が問うと、「そんなはずはありません」と彼女は応えた。そして彼女は私の手を取り庭園をぬけ、ある御殿の入り口にたどり着いた。扉が開き、そこから一条の光の筋がさして私の周り一体を照らし出した。その眩いばかりの美しさと輝きの建物に私は入った。そのさまは世界のいずこにても見かけたことのない有様だった。建物の中を歩いていると扉が開いて我々は庭園へと誘い出された。彼女がそちらに向かい私は後を追った。そこで我々は廷臣たちに出くわしたが、彼らの顔は真珠のようで、その手には香炉があった。少女が彼らに尋ねた。「こちらの女性にお香はございませんか」。すると彼らはこう応えた。「彼女にもありましたが、彼女はそれを置いてきました」。少女は私に次のように言った。

あなたの祈りは神の御使いの眠る間光り輝くが
 あなたの眠りは祈りに強く反する
 生は、あなたが賢く用いるならば、宝であるが

時またずその生は枯れて死を迎える

それから彼女は私の前から消え去り、日の出とともに私は目覚めた。が、誓って言うが、彼女のことを思い出すや否や私は狂乱し自分が誰かもわからなくなった。(それからラービアは卒倒した。)

奴隷の少女のラービアに対する非難と天のお香を使わせないこと——何故なら数夜彼女は祈らなかつたから——は別として、彼女が回想するように、この夢はラービアが病になり、そのせいで徹夜して祈り『クルアーン』を朗誦することができなかつた後で現れた。我々の注意をとらえるのは楽園の皮肉な夢はばかりではない。むしろ、注目すべきは、醜悪な世界を去り、憧れの永遠の世界へと昇るといふ燃える情熱であり、美しさと愛おしさと素晴らしい寄り添いであり、神話の壮麗に輝く煌く光の世界である。確かに、昇天の閃きにおける無言の陶醉は神を愛する者の陶醉でも約束された楽園の陶醉でもなく、むしろ彼女自身の分身の陶醉であり、これは聖女の深みを開示し神話的乙女に具現化したのである。美の愛おしさに彼女は目を奪われ、彼女を美しい緑色の鳥への注意から逸らした(ここでは、緑という色の魅惑的で豊かな意味、つまり、生、美、豊穡、再生、永遠などを象徴するその意味に注意されたい)。この華麗な神話的乙女について語る事が可能だろうか。それはラービアを導いて永遠の壮麗なる楽園を経巡り、その天上的分身として想像され、ともにいることで分裂は統一体になり、その姿見を通じて迷いさまよう地上の陰は欠けていた永遠の起源に回帰するのだろうか。しかしながら、出会いと開示の瞬間は稲妻のように閃き、夢もしくは東の間の幻影なくしては捉えることはできない。目覚めればその瞬間は過ぎ抜けてしまい、心は喪失したものを求め恋焦がれ狂乱してしまう。

聖女は、自分の純粋な天上的イメージである分身に対する愛を成就するのだろうか。思い上がった自己陶醉の罠に陥り、その睦まじき心地よい分身を崇め、永遠なる憧れの一者へ向かう途上での楽園への旅で完成に到達するのだろうか。立場は転換され、自己陶酔的愛する者、その愛の対象の証しは、彼女の美しい乙女、想像の天界で開示された彼女自身によって愛の対称であ

る一者から逸脱し、失われ切望された彼女の分身との完全統合を探求するのだろうか。

矛盾し相反する表現の罫に落ちた読解は、今度は、その言葉に表れていない意図が疑いえないような拡散的読み、または再解釈を必要とする。

■ 訳註

- * 2009年にエジプトにおいて、本グローバルCOEプログラム、NIHUプログラム・イスラーム地域研究、エジプト高等文化評議会、アレクサンドリア図書館、日本学術振興会カイロ研究連絡センター、カイロ大学文学部社会調査研究センターの共催にて、国際シンポジウム「死生をめぐる対話：エジプトからの眺望 (Dialogue on Death and Life: Views from Egypt)」が行われた。本稿はそのカイロ・セッション（2009年9月30日、於エジプト高等文化評議会）第1部：「現世と来世——哲学・神学・宗教」での発表に基づくものである。本訳稿は、サラ・エナーニー氏（カイロ大学講師）による英訳稿を底本に、著者のアラビア語原稿を参照しつつ訳出したものの後半部である。前編は『死生学研究』14号に掲載された。なお、本稿を含む諸発表のアラビア語版および英語版の報告書は、エジプト高等文化評議会から近く上梓される。

■ 原註

- 10 Farīd al-Dīn al-‘Aṭṭār, *Tadhkirat al-awliyā*, ed. R. A. Nicholson, vol. 1, pp. 59, 73. [フアリード・ウッディーン・ムハンマド・アッターール『イスラーム神秘主義聖者列伝』藤井守男訳（国書刊行会、1998年）、54頁。]
- 11 [Abū al-Qāsim] al-Qushayrī, *al-Risālah al-Qashariyah*, pp. 271-278.
- 12 Ibn ‘Arabī, *Fuṣūṣ al-ḥikam*, al-Faṣṣ al-Ādamī.

■ 参考文献

- Abd el-Haq, Munsif. *El-Kitaba wa-el-Tajriba el-Sufiya*. Namuzag Ibn Arabi: Morocco.
- Badawy, abd el-Rahman. *Shahadat el-Isbq el-Ilabi*. Dar el-Tiba'a wa-el-Nashr: Kuwait.
- , *Tarikh el-Tasawuf el-Islami*. Dar el-Tiba'a wa-el-Nashr: Kuwait.
- Cook, Michael. *El-Amr bil-Ma'ruf wan-Nabiu 'anil-Munkar*. El-Shabaka el-Arabiya lil-Abhass wa-

el-Nashr.

El-Asfahani, Abu Na'im. *Helyat el-Awliaa wa Tabaqat el-Asfiyaa*. El-Fikr.

El-Qashiri. *El-Risala el-Qasbiriya*. El-Geel: Beirut.

El-Sayed, Radwan. *El-Mujtama' wa-el-Dawla*.

(ハーラ・アフマド・フアード／Hala Ahmad Fou'ad Mustafa カイロ大学文学部講師)

(おの・じゅんいち 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程〔イスラム学〕)

(なかにし・ゆうき 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程〔イスラム学〕)

(よしだ・きょうこ 東京大学大学院人文社会系研究科助教〔イスラム学〕)